〈恋愛至上〉の描き方 ——泉鏡花「外科室」論——

峯村至津子

本論文は、泉鏡花「外科室」（『文芸倶楽部』第六編〔明治二八・六・二〇　博文館〕）について、従来の研究史とその問題点を整理しつつ、これまで十分注意されてこなかった点、解釈が分かれている点などに焦点を当て、再度作品を精読し、同時代の環境を意識しながら再検討するものである。

一　〈麻酔無しでの外科手術〉というモチーフとその意義 ——「外科室」（上）の素材——

①「峭抜の想」、「奇警」なる「着眼」 ——同時代批評の捉え方——

「外科室」はその発表当時、奇抜な着想と深刻な内容とを持つ作品として評価された。本作は、小石川植物園での散策中に、すれ違うその一瞬で恋に落ちた男女が、その後九年を経て、外科手術の執刀医（高峰医学士）と患者（貴船伯爵夫人）として再会し、貴船夫人の強い要求を容れて高峰医学士が麻酔無しでの手術を行う中、夫人が思いを吐露し、高峰の握るメスに自らの手を添えて自決、高峰も同日中に自ら命を絶つ、という内容の作品として同時代から読まれてきた。しかし近年は、ヒロインと高峰との間に、特に高峰の側からの恋情を読み得るのかどうかという点に疑義が出さ

れており、その点については本稿でも後に詳述するが、長年自明のこととされてきた〈至上の恋愛を描いた作品〉という評価に揺さぶりをかけようとする動きが現れてきている。こうした現状を踏まえると、同時代から主流をなしてきた先に示した読み方についても、ただいたずらに定説として無批判に受け入れたり単に古くからの固定化した読みとして排除したりするのではなく、長年そのように読まれてきた理由（そういう読み方を誘引する根拠）を改めて意識し、再検討すべき時期に来ているのではないかと考えられる。それを目的とする本稿に於いて、まずは本作が同時代の文壇人の眼に冒頭に記した如き印象を与えた理由を、本作で展開されるモチーフの中でも特に〈非現実的〉と見える、「外科室」（上）を特徴づけている〈麻酔無しでの外科手術〉に着目することで再考する。

以下に挙げる同時代批評は、これまでも注意されてきたものではあるが、同時代の環境を特に意識する本稿に於いては、論の展開上改めて確認しておきたい。作品発表の翌月、田岡嶺雲が主筆を務める『青年文』第一巻六号（明治二八・七・一〇　少年園）所載の批評は、「夜行巡査」（『文芸倶楽部』第四編〔明治二八・四・二〇〕）と共に「外科室」を高く評価して次のように言う（引用部の傍線は旧来の小説の特徴、二重傍線は鏡花作品の特徴を、それぞれ評者が表した語句である）。

天下が軽浮なる恋愛小説に飽き、浅薄なる侠客小説に飽き、残忍なる探偵小説に飽きて、漸く沈着なる、深峭なるものをもとむるの時に於て出でゝ、峭抜の想に富み、深酷の筆を奮ひ、其観察は人間の皮相を徹して複雑なる人情の機微に達し、着眼は奇警にして能く、旧思想の窠臼を出で、別に小説界に一生面を開きたる、鏡花が時運の潮流に乗じたるに非ずして何ぞ。其『夜行巡査』既に有数の作なり、『外科室』趣向亦奇抜、（時文「泉鏡花」三頁。）[1]

従来の「軽浮」「浅薄」なるものと一線を画し、「小説界に一生面を開きたる」と評されたように、本作が同時代の文壇に、これまでの小説からは得られなかった或る斬新な印象を与えたことは、複数の同時代批評から窺うことができる（本稿四章参照）。青年文記者によって、「深酷」、「峭抜の想」、「奇警」なる「着眼」などと評された本作は、確かに「奇抜」

な「趣向」に満ちており、その最たるものの一つが〈麻酔無しでの外科手術〉であると言えるが、いったいこれは当時に於いてどれほど、また、どのように奇抜だったのか。未だその実態が解明し尽くされているとは言い難い面も残る。本章ではまず、同時代人に「奇警」「奇抜」と言わしめた材の採り方について、その性格を検討する。

②〈麻酔無しでの外科手術〉というモチーフ

患者である貴船伯爵夫人の強硬な主張により、執刀医高峰は、麻酔無しでの外科手術を決行する。一見極めて衝撃的に思えるこのモチーフではあるが、しかし、これは必ずしも鏡花の独創というわけではない。小説に於ける主要なモチーフとしては、管見の限り「外科室」以前には見られないものであるが、当時の新聞記事を繙くと、麻酔無しの外科手術・外科施療の記事に行き当たり、当時の一般大衆にとって見聞する可能性がありうる話だったこと、即ち、完全に現実から遊離した荒唐無稽な話とは言いきれない面があることがわかる。

試みに、「外科室」発表の明治二十八年までの麻酔に関わる記事を『読売新聞』『朝日新聞』両紙で見てみると、[2] 麻酔無しの外科手術・施療の記事は、『朝日新聞』に二件（但し、いずれも大阪朝刊）、『読売新聞』に二件、計四件見出すことができた。その内、特に「外科室」に通ずる要素が濃厚な二件を以下に引用する（注(3)で引用する記事も含め、引用の二重傍線部は全く同一とは言えないまでも「外科室」に通ずる内容、破線部は「外科室」とは異なる内容が見られる箇所である）。[3]『読売新聞』明治十二年五月二十八日朝刊二面には、旧越前福井藩中戸田義規が、戊辰戦争の折に胸部に受けた銃弾がいまだ体内に残っていたのを、下谷病院にて橋本一等軍医正が手術に当たり、「コロ、ホルムを嗅せても戸田氏は気丈にて一向きかぬが達（たツ）て療治をして呉と頼むゆゑ」麻酔無しで「腋の下を八寸ほど切り割ッて」弾丸を摘出すること二時間、「此間苦痛を堪へた戸田氏は骨を削ッて矢疵を療治した関羽にも勝り橋本軍医の手術は華陀も遠く及びますまい」とあり、関羽

の故事が引き合いに出され、被施術者の勇気がそれを凌駕するものとして賞賛されている。また、『朝日新聞』明治十九年八月二十八日朝刊三面にも、「兵卒も関羽に劣らず」の見出しで、西本捨松という二等銃卒の怪我の治療について同趣の記事が見える。

麻酔剤を用ひざれば兎ても其痛に堪へられまじと医官がコロルホームを嗅がしめんとせしに（中略）苟くも軍人の身にして麻酔剤を用ひ治療を受けたりといはれては我陸軍の体面にも拘はれば是非に此儘手術を施されたしと強て乞ふにぞ其意に任せて治療ありしに自若として少しも動かず能く苦痛を忍びたれば医官は孰れも捨松が勇気の盛んなるを感賞せられたりといふ

「外科室」で用いられる吸引式の麻酔剤もクロロホルムが想定されること[4]、被施術者が強硬に麻酔無しの施術を要求し、その言葉通り苦痛に堪えること[5]、等々、記事の二重傍線部には「外科室」と重なる内容が見て取れる。また「外科室」では、麻酔を拒む貴船夫人に対し臨検の医博士が「肉を殺いで、骨を削る」（七頁）手術の実態を説く際、語り手が「これ到底関雲長にあらざるよりは、堪へ得べきことにあらず」（同右）と関羽の故事を引き合いに出しているが、右に引用した二件の記事も、見出し或いは本文に於いて関羽に言及しているところから、麻酔無しの療治に平然と堪え得る→関羽というふうに連想を働かせて記述することも、或る定型であったことが窺える。

こうして見ると、この素材は、現実との接点を一切持たない絵空事とは言えない。だが一方では、新聞が採録しているところから珍奇なものであることは間違いなく、そして記事で取りあげられている事件の当事者はすべて男性であり、その内容は、主に軍人としての胆力を示す武勇伝、といった性格のものがほとんどである（注(3)に挙げた例も含め、引用の破線部参照）。それを「外科室」では、「手足は綾羅にだも堪へざるべし」（二頁）と言われるヒロインに転用しているところが、こうした同時代の例の中で見た場合に、斬新な点であったと言えるだろう。軍に所属する者として、武人とし

ての意気を見せるといった文脈に於いて取りあげられてきたモチーフが、恋愛に於いて、女性の思いを守るという文脈に転用されている点が、両者の大きな違いであり、それによってこのモチーフの異常さも、より際立つものとなり得たと言えるのではないだろうか。憔悴しきった重病人である高貴なヒロインが、秘密を秘すためという理由を掲げて自ら麻酔無しの手術を望み、担当医の方もそれを受け入れて執刀に踏み切る。こうして「外科室」に取り込まれた〈麻酔無しでの手術〉のモチーフは、それを望むヒロインと、それを受け入れる男性側の主人公、奇矯な行為の遂行に於いて言わば共犯関係を結ぶ二人の、その双方の心の内に何があるのかを読者に考えさせ、彼らの心に秘めたるものの重みを印象づける、そういう効果を上げ得る材の採り方だったと考えられる。

③〈麻酔による譫言〉というモチーフ

そもそも「外科室」（上）で麻酔無しの手術が行われるに至ったのは、貴船夫人が「魔酔剤（ねむりぐすり）は譫言（うはごと）を謂ふと申（もを）から、それが恐くつてなりません」（五頁）というように、秘密を無意識裡に漏らすことを怖れた彼女が麻酔を拒否したことによる。作品を展開させる重要な要件としての〈譫言を喋る危険性を理由とした、外科手術に於ける麻酔拒否〉、この素材についても、同時代の言説の中に置き直して眺めてみたい。

河内重雄氏は、明治二十年代から三十年代にかけて出版された医学書の記述に、「外科室」執筆に於いて想定されたと見られる麻酔剤クロロホルムについて、譫言を誘発することが明記されていることを指摘している（注（4）参照、一二六頁）。青木紗氏も麻酔による譫言を取りあげた当時の新聞記事を、一件部分的に取りあげ（『読売新聞』明治二十五年八月十九日三面所載の記事で、麻酔をかけられたある夫人が、施術中に夫の面前で「間夫と密会の事」を譫言で話してしまうという内容）、「貴船伯爵夫人が恐れた麻酔剤の認識など、医療における描写は概ね一定のリアリティを

持ち得ていたことがわかる」と言う。[6]「外科室」の重要なモチーフが事実に即しているのは両氏の指摘の通りであるが、これをリアリティの確保という点から論じるのみでは不十分であるように考えられる。前節で見たように現実との接点を確実に用意している本作ではあるが、[7]医学書は一般的な読み物とは言えず、新聞報道に於いても〈麻酔による譫言〉がさほど頻繁に取りあげられていたわけでもない。[8]青木氏による当該記事の紹介は、上記（　）内破線部に記したことをごく簡潔に述べるのみで、氏が引用していないところも多い為、もう少し詳しくこの記事について見ておきたい。

青木氏の論では当該記事のタイトルが示されていないが、これは「雑報」のトップに掲載されている「魔睡奇談」と題された記事である。「奇談」とあるところから、読者に新奇な材料を提供しようという意図が明瞭に窺えるのだが、「今や医術益す〳〵開けて病を治すること神の如く人をして復遺憾なからしむるまでに進みぬ」という時代にあって「外科医が重症・劇疾を治するに当りて魔睡剤を用ひ」ることを「神変不思議」なることと捉えるこの記事は、近代的なもの、科学的なものの間隙から漏れ出す、人の内に在る猥雑な人間性に目を注ぐものであると言える。[9]麻酔剤を施された病者が知覚を失って「人間以外の一怪物と為」り、「囈語」を発するのを、「其魔睡剤を用ひるに当りて患者は我れ知らず随分面白き現象を呈して傍人を笑はせ又驚かすことあり」と言っているように、新聞の雑報記事らしく、奇矯な内容を面白おかしく伝えて読者の気を引こうとする意図が見て取れる。特に「囈語」の内容を列挙しているところでは、「有髯の丈夫にして都々一端唄を唸り又は歌妓を挑むが如き聞き悪きことを語るものあり」、「高利貸に借金の言訳を為すものあれば」「下女に焼芋の使者を命ずる貴夫人あり、又十年前の事を口走ッて我が秘事を喋舌り立つるものあれば大尽に金を無心して俳優に注ぎ込む秘密を自白する校書もあるべし千差万別各々我が脳中に描き在るものを残らずさらけ出してこゝ一場の奇談陳列場を開くなり」とあって、波線部は「外科室」で貴船伯爵夫人が危惧することにほぼそのまま通じるような内容ではあるが、破線部の表現に露わなように、総じてこの記事の主眼は、下世話な話題を取りあげて滑稽

味を漂わせるというところに置かれているように見える。その「中にも最も可笑しくして且つ気の毒なるは某病院に在りし話なり」として紹介されるのが、青木氏が取りあげている挿話である。[10] 氏が引用している部分（注(10)参照）の後には「神ぞ男は貴君に限る今にも折あらば貴君の家に行かんほどに何日の約束を忘れず必ず女房にして下されなど淫けたる言を繰り返すに傍なる医師は良人の手前気の毒に堪へず」というように「囈語」の内容が示され、更に「全快して翌日退院といふ前日に良人なる人篤と不義の実否を尋ねたる上妻女不埒の旨を申し述べ家には引取らず病院より直ちに里方へ帰したる由」といった後日談も記されている。先の波線部のように「外科室」でヒロインによって想定されていることに通ずる内容を含みつつも、俗なる境の猥雑な話柄を、末尾に付されているありふれた処世訓――「此の外さま〳〵なる事を口走りて人にも迷惑を掛け我もまた奇禍を買ふもの少なからざる由之に付けても男子たること婦人たることを問はず其平生を慎むことは最も肝要にして従ッて言語・応対・品行・処世の上に於て常に慎重に慎重を重ね仮初にも卑猥軽忽を誡しめ一言一行忽せにすべからざることなり」――に収斂させている。

「外科室」は、こうした新聞で報道されているような珍奇なものを素材として取り込んでいるが、それだけでは「峭抜」、「深酷（深刻）」などと評されるはずはない。新聞記事の面白おかしく興味をそそるような内容から、滑稽味、猥雑味などの俗気を排除したかたちで「外科室」は成立している。当時、こうした新聞記事などを通してある程度知られていた可能性のある〈麻酔による譫言〉というモチーフを、ヒロインがそれを理由として麻酔を拒否し、そのまま手術が行われる、という展開の中に埋め込むことで、命がけで主張を通すヒロインと、それを受け入れる高峰医学士、主人公二人の心の内にあるものに読者の目を注がせてゆく、そういう作品として本作を成立させていると言えるだろう。

④「外科室」（上）のモチーフ、その意義と、研究史への問題提起

〈麻酔無しでの手術〉と、それが行われる原因となった〈譫言を喋る危険性を理由とした、外科手術を受けるに当たっての麻酔拒否〉、右に挙げた「外科室」（上）を展開させる主要なモチーフは、二つながら、当時の新聞記事に見える素材を扱っており、〈非現実的〉とは言え、これらは現実から完全に切り離されたものであるとは言えない。しかし、「外科室」に取り込まれたこれらのモチーフは、現実との接点を確保しつつも、新聞での取りあげられ方とは差異化を図っており、いずれも主人公二人の心の内に読者の意識を集中させるよう、作中に於いて機能させられようとしていたと見える。これが、「軽浮」「浅薄」なるものとは一線を画した作品という印象を同時代の読者に与えた要因の一つであったのではないだろうか。そして、こうした材の採り方の複数のモチーフに跨がる共通性から、これが作者の意図的なものであった可能性も想定できる。

そもそも「外科室」は、その冒頭の一文からして、手術への並々ならぬ語り手の関心が示されてもいた。

実は好奇心の故に、然れども予は予が画師たるを利器として兎も角も口実を設けつゝ、予と兄弟も啻ならざる医学士高峯を強ひて、某の日東京府下の一病院に於て、渠が刀を下すべき、貴船伯爵夫人の手術をば予をして見せしむることを余儀なくしたり　（一頁）

二重傍線部に見られる当然の確信を示す助動詞や対象を取り立てて強調する助詞の使用を（下）で語られていることと併せ見たとき、語り手は、高峯共々心惹かれた九年前の女性が現在の貴船伯爵夫人であることを知っており、その手術を高峯が執刀するという情報を摑んだからこそ、強いて見学しようと画策したと読むことが促されよう。[11] そして波線部の逆接表現に注目すれば、画師であることを方便として設けた表向きの口実とは別の、「ある好奇心」による理由があったことも明示されており、九年前以降、「年齢に於ても、地位に於ても、高峯は室なからざるべからざる身なるにも関

はらず、家を納むる夫人なく、然も渠は学生たりし時代より品行一層謹厳にてありし」（一三頁）という身の処し方を見ながら密かに想像し続けていた高峰の恋情とその顛末を確認するために、語り手は手術を見学しようとしたと読める。[12] このように手術への語り手の好奇心が強調される冒頭部のみならず、本章で見てきたように、その材の採り方からも、手術の背後にあるものに読者の関心を惹きつけようとする試みが見て取れる。

前出『青年文』第一巻六号所載の評では、ヒロインの心の内の描き方に対して以下の如き不満が述べられていた。「其学士の在学中、一たび小石川の植物園に夫人其頃の令嬢と邂逅してより、其美にうたれて、終に死に至るまで其厳正なる品行を守りて婦女に接せざるといふが如きは必ずしも咎めず。対手の夫人が情懐は余りに筆を吝まれて、外科室の出来事は殆んど夢の如きの感あり」（時文「『外科室』」一二頁）とあり、九年前の邂逅時より（上）の外科室での一件に至るまでのヒロインの心情表現が乏しいため、（上）の場面がリアリティを欠くとの指摘と読み取れる。しかし、本章で見たような材の採り方からは、男性側の主人公である高峰だけではなく、ヒロインの心に読者の目を注がせるよう、作者が工夫を凝らしていたことが窺える。

主人公たちの心の内に読者の目を向けさせようとする本作は、『帝国文学』第八号（明治二八・八・一〇　帝国文学会）所載、無署名「小説界の新傾向」に於いて、「近時吾文壇に一種深刻なる一新思潮の横溢し来れる」中で、「鏡花子はよく人生の恨事を知れり、而して此恨事が常軌の道徳を以て抑圧すべからざるを知れり、人間の胸の内にも滂湃たる激浪のやゝもすれば、理性を溺らせんとするを知れり」として、登場人物の内にある、道徳や理性で抑えきれない激情を評価されていた（「雑報」欄、一〇五頁）。貴船伯爵夫人の心中に激浪が渦巻いていることは、麻酔を拒んでまで守りたいものがあると公言するところから確実に読み取れる。そして同時に、「激浪」は高峰の側にも認められるべきであろう。麻酔無しの手術は、ヒロインがそれをいくら望んだとしても、高峰が肯んじなければ決して成立しないからである。本章

②で見た、当時の新聞記事に於けるこのモチーフの取りあげられ方――武人の豪胆さを象徴するような――を見ても、病で衰弱したヒロインに対して、しかも「我国の上流社会全体の喜憂に関すべき」重大な手術に際して「この大なる責任を荷へる身の」（以上二頁）高峰が、麻酔無しの執刀を選択するのは甚だ異常であると言わねばならない。ヒロインの要求をそのまま許容する高峰の奇矯な行動は、背後に彼女に対する特別な感情を想定しなければ成り立たない。

①冒頭でも述べたように、近年、高峰の側からのヒロインへの恋情を否定し、高峰の自死も医師としての責任を果たせなかった故の死であるとする読み方が複数の論者から提出されている[13]けれども、それらの論は、なぜ高峰が麻酔無しの手術に向かうのか、というその肝心の点を説明できていない。岡本夢紬氏は、「一介の外科医ではない、「外科々長」である高峰にはこの麻酔なしの手術にも成功の算段があったのではないか」（注(13)参照、三〇五頁）と言うが、そもそも職務に忠実に手術の成功を何より重んじるのであれば、夫人の身体の自由を奪ってまで麻酔を施そうとする「臨検の医博士」（七頁）に加担して、執刀医の責任と権限により麻酔をさせれば済むだけのことである。麻酔無しでの手術は、ヒロインが痛みに堪えきれずに動くかもしれない危険と常に隣り合わせなのだから、手術が成功するか否かは、高峰にとってみれば自らの技術への自信だけではどうにもならないことになる。これらの論では、医博士の判断を無視して高峰がそうした異常な行動に出る理由が一切説明されていない。また、麻酔の使用という、ヒロインの命を救う為の医師としての最善の道を放棄しているにも拘わらず、患者の命を救えなかった故に医師としての責任を取って自殺した、という解釈も甚だ矛盾しているが、その点についても説明がなされていない。

「外科室」の主人公二人に〈至上の恋愛〉を見る読み方は、冒頭にも述べたように、同時代批評以来、研究史に於いて定説化していた。先に挙げた野口氏、岡本氏の読みは、こうした固定化した評価を見直そうとする研究史の流れに位置づけられるものであり、勿論、新たな読み方を模索して硬直した評価に風穴を開けようとする営みは否定されるべき

ではない。しかし、近年の研究史の動向を見ていると、同時代以来の読み方を否定し新たな読み方を提示しようとするあまり、作品の内実や作品発表当時に作者が直面していたであろう問題意識から遠ざかっているように見える。

例えば中川智寛氏は、解釈の多様性ということに拘るあまり、（下）で「高峰他が小石川植物園で偶然目にした絶世の美女と「上」の貴船伯爵夫人とが同一人物であるかどうかの判断は、一定の留保を加えざるを得ない」、回想から語りの現在に立ち戻っての（下）末尾の語り手の発言である「其後九年を経て病院の彼のことありしまで、高峰は彼の婦人のことにつきて、予にすら一言をも語らざりしかど」（一三頁）の一文だけでは「同一人物である確証としては薄弱」である、などと述べている（前出論文、七二頁）が、語り手の個々の発言の真偽を疑うには、それを促すような、当該発言を相対化して検討するに足る根拠が作品内に存在することが求められよう。疑うべき根拠なく疑義を差し挟み出したら、特に一人称の語りはすべて語り手の妄想の可能性を否定できずに何も読めなくなろうし、同時にすべての語りは真偽の可能性を等分に持つが故に判断不可能ということにもなる。中川氏が引く語り手の言は、右引用部の直後で貴船夫人と同日の高峰の自死が語られているように、（上）の外科手術の場面より更に後の時点から語られているのだから、九年前に強い印象を植え付けられた女性に外科室で再会し、同一人物と認めた上で発せられているはずである。その言を特段の根拠なく信頼を欠くとし、麻酔無しの手術の背後にそれを支える両者の心情を読まないとなると、主人公たちの心に注目させようとする作品の求心力やそれに伴う緊迫感は間違いなく失墜する。九年前の美女と貴船夫人が別人である可能性を敢えて提示するのであれば、先の傍線部の如く同一人物とするような虚偽の発言を何故語り手はする必要があるのか、それによって何が表現されているのかを説明できなければならないだろう。高峰と夫人の間に本来存在しない相思の恋愛を無理に読み込もうとする語りは、画師である語り手の「芸術本位性が際立つ」（前出、七三頁）ものだと中川氏は言うけれども[14]、そういう語り手のあり方（右圏点部）は、果たして「真の美」の追究・表現と言えるのか。こ

ういう読み方は語り手の芸術家としてのありようを却って否定することになるように見えるが、そのあたりの考察もなされていない。研究史を塗りかえようと新たな読み方の提示に努めることが、却って研究の硬直を招くこともあるように感じられる。

本稿は、作家が作品のうえに刻んだ言葉と向き合い、同時代の環境の中でそれらを改めて見直すことで、新たに引き出せるものがないかどうか試みるものである。最近の拙稿「泉鏡花「愛と婚姻」の再検討」[15]もそれを意図した論考であったが、それと一対のものとして提示することを構想したのが本稿である。

本章では「外科室」（上）の中核をなす、同時代批評が言うところの「奇抜」なモチーフの再検討から、それらが単に新奇さを狙ったものではなく、それらのモチーフの従来の扱われ方とは明確な差異が設けられ、主人公たちの心へと読者の眼を向かわせるような仕掛けが見られることを指摘した。先行研究では、「外科室」の「解釈の多様さ」が主人公「二人の吐露されざる心情と、関わっている部分が多い」とする論もある（中川氏、前出六八頁）が、両者の過激な行動が寡言を補完し、二人の間に存在するお互いへの特別な感情を表現するように描かれていることを見過ごすべきではないだろう。これまで十分意識されてこなかったようにも見えるが、〈麻酔無しでの手術〉とは、本作のテーマを〈至上の恋愛〉と見る読み方を支え得る、大きな根拠の一つとして作品内に置かれているのではないだろうか。

そして、〈麻酔無しでの手術〉が、患者の心にある秘密保持を理由として病院の外科室に於いて展開されることについては、それを求める方にも受け入れて実行する方にも、社会常識からの甚だしい逸脱を指摘できよう。実のところ本作の主人公二人には、こうした社会的規範を蹂躙することを顕著に見て取ることができる。そうした描き方も、二人の間にある〈至上の恋愛〉を支える根拠として効力を発揮していると思われるが、結論を急がず、次章では、これまでの研究史に於いて見解が分かれている点に留意しつつ、「外科室」に於ける主人公二人と社会との関係について検討する。

二　「天なく、地なく、社会なく」――社会を無化する主人公たち――

①死と、社会からの逸脱と、どちらが先か――先行研究への疑問――

ヒロインは自決から死に至ることによって、現世の社会的しがらみから解き放たれた――「外科室」を講読や演習などの授業で扱っていると、小説前半部（上）の末尾について、受講生から右のような解釈が提示されることが屢々ある。麻酔無しでの手術が佳境に達した時、執刀医高峰の手にするメスに片手を添えて自らの胸をかき切った貴船夫人と、彼女がその際に発した言葉に対する高峰の発言を受け、語り手が二人に対して、「其時の二人が状（さま）、恰も二人の身辺には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきが如くなりし」（一〇頁）と語るのが当該箇所のあらましである。

先に示したのは、ヒロインが現世の様々な束縛から死を選ぶことによって初めて逃れることができた、という解釈であり、こういった解釈は、「夜行巡査」や「外科室」について、「世間の不調子と、人間の失望困難とを訟へて、社会の罪悪をにくむの傾向あり」（時文「一新思潮」、『文学界』第三一号〔明治二八・七・三〇　文学界雑誌社〕三二頁）というように社会の圧力に虐げられる悲惨とそれに対する批判を描いたものとする同時代批評に端を発し、研究史に於いても近年に至るまで根強く見られるものである。[16] 注(16)に挙げた先行研究で共通して主張されているのは、現実の社会に於ける制約が障害となり、それに虐げられる主人公たちが現世でその恋を「成就」させることができない（それを描くことを通して主人公たちの恋を阻む社会が批判されている）ということ、そして彼らは社会の圧制から純愛を守るために死を選んだということ、の二点である。[17] しかし、「外科室」と同時期の論説「愛と婚姻」（『太陽』第一巻五号〔明治二八・五・五　博文館〕「家庭」欄初出、署名は「鏡花生」）に於いては、鏡花はそもそも婚姻を〈恋愛の成就〉であるとは認めていないこと、社会的制度としての婚姻を、人間の自由な感情を抑圧するものとして否定していること（注(15)の拙稿参照）、などを考えると、「外

科室」執筆時に於いて、貴船夫人と高峰とが現世で婚姻というかたちで結ばれることを、作者である鏡花自身は〈恋愛の成就〉とは捉えないであろうこと、二人の思いが通じ合っていることだけで、作者はそこに〈恋愛の成就〉を見ているであろうこと、が想定される。小説である「外科室」は、論説「愛と婚姻」とは一旦区別して内容を検討すべきであると考えるが、少なくとも「愛と婚姻」の内容に照らして、右に挙げたような先行研究に於ける解釈については再考する必要があると言えるだろう。

研究史に於いては一方で、「実社会との葛藤をほとんど持たない」ことをその「特質」とする「「外科室」の愛」は「お互いの心の中で完成している愛であって、婚姻制度によって妨げられているわけでもなく、また現世での結合を望んでいるわけでもない」といった、先に挙げた諸説に対立する見解も十川信介氏らによって早くから提出されてきた[18]。それにも拘わらず注(16)に挙げたような見解が途絶えず主張され続けてきたことを見ると、改めて作品本文に即して見直すことが必要であると考えられる。貴船夫人と高峰は、現実社会の制約によって虐げられ「うちひしがれ」ているのか、彼らにとっての恋愛の「成就」とは何か、彼らの恋愛はまこと現世で成就していないのか、彼らの死が意味するものは何か、一旦「愛と婚姻」から離れて、本章及び次章ではこれらの問題を「外科室」本文から読み直す。

②貴船伯爵夫人と社会との関わり方

先に引用した、「外科室」(上)末尾の一文に見られるように、語り手は、主人公二人が、社会に代表されるような、「地」上にある彼らを取り巻くものすべてと、その対極に想定される「天」と、その双方を無化するような、二人だけの境地を現出させていることを見て取っているわけだが、結論を先に言えば、本章①冒頭に示したような解釈は、こうした本作の性質を語る上で的を外したものと言わざるを得ない。なぜならこの作品の主人公たちは、〈死〉によって社会的規

範から解放されたわけではないからである。むしろこの作品では、ヒロインの自決の局面以前から、恋愛をのみ重んじて社会的規範を無視する主人公たちの言動を描き、そこに十川氏が言う如く社会との対立による葛藤をも描かないがために、結果的に現実社会が徹底的に無化される、という方法が選び取られている。笠原伸夫氏の「過激にして根源的な愛は、伯爵夫人と医学士のあいだの交歓のように、死の瞬間に顕われでる」（前出、七三頁）とする見解もあるが、彼らの社会規範からの逸脱が最高潮に達するのがヒロインの自決をめぐる場面であるということは言えるにしても、逸脱そのものは、それ以前から終始見られると言っても過言ではない。以下、作品から根拠を示しながら見ていこう。

「私はね心に一つ秘密がある。魔酔剤（ねむりぐすり）は譫言（うはごと）を謂ふと申（もを）から、それが恐くつてなりません。何卒（どうぞ）もう、眠らずにお療治が出来ないやうなら、もう、〳〵快（なほ）らんでも可（い）い、よして下さい」（五頁）――貴船夫人の常識からの逸脱は、彼女のこの発言に端的に表れている。第一に、彼女には一つの秘密があり、それを無意識裡に暴露することを恐れていること、そして「快らんでも可い」という言葉が証するように、それが自身の命よりも大事なものだということを公言して憚らないということである（「外科室」内には、医療関係者だけではなく、夫である貴船伯爵や親族、夫人の身近に仕える腰元、執刀医高峰の親友である語り手、これらの人々が立ち会って、夫人の手術を見守っているという設定になっている）。彼女は、自身の病が回復するか否かによって左右される「上流社会全体の喜憂」（二頁）などは無視し、夫・娘・親族の憂慮を知りつつも、命を全うして彼らを安んずる道を放棄しようとする意思を主張していることになる。妻・母としての役目を果たし、上流社会に於ける立場を守ることよりも、心に秘めてきた秘密の方を重んじているのであり、語り手が「良人（をつと）たる者がこれを聞ける胸中いかむ。此言（このこと）をしてもし平生にあらしめば、必ず一条の紛紜を惹起すに相違なき」（五頁）と、夫である伯爵への同情を述べているように、これが問題視される行為であることは確実なこととして作品内でも意識されている。[19] さらに、貴船夫人はその秘密を守るためということを理由として、「なに、私や、じつと

して居る、動きやあしないから、切つておくれ。」（六頁）と、麻酔無しの手術という非常識なことを、強硬に主張する。そもそも有夫のヒロインが公衆の面前で先のような発言をし、心にある秘密を無意識裡に口走ることを避けるために麻酔無しでの執刀を要求する、という時点で、彼女が社会常識から極端に逸脱しているのは、その気後れの欠片さえも見えない物言いからしても、火を見るより明らかなのである。となれば、彼女が秘密を秘そうとする理由もまた、世間体を慮ってのものでないことは確実と言えよう[20]。

加えて夫へのぞんざいな対応も描かれ、ヒロインの、世間の常識（注(19)参照）に対する無頓着ぶりが強調される。夫からの、〈自分にも言えないことなのか〉という問いかけや、〈麻酔＝譫言を言うと決まったものでもあるまい〉といった取りなしに対して、「はい、誰にも聞かすことはなりません。」「否（いえ）、このくらゐ思つて居れば、屹（きつ）と謂ひますに違ひありません。」と「決然たる」態度で応対する貴船夫人は（以上五頁）、「そんな、また、無理を謂ふ。」と、どこまでも下手に出る夫に対し、次の如く振る舞う。

『もう、御免下さいまし。』

投棄（すつる）が如く恁謂（かく）ひつゝ、伯爵夫人は寐返りして、横に背かむとしたりしが、病める身のまゝならで、歯を鳴らす音聞えたり。（以上、六頁）

鈴木啓子氏はこの箇所の貴船夫人の言動について、「秘めたる愛の激しさとともに、夫婦間の出自における身分違いをも匂わせている」とするが[21]、そういった身分差があったとしても、ヒロインの行為が当時の女性のあるべき姿から大きく外れたものであることは揺るがない。投げ捨てるような物言い、会話を中途で一方的に打ち切り夫に背を向けようとし、それがままならない苛立ちを露わにする、などの行為が、夫婦二人だけの空間ではない場で展開されているのであり[22]、ヒロインの言動は、単に常識外れと言うだけでは収まらないほど、夫の体面に一切配慮が見られない、言ってみ

れば徹底的に夫の面子を傷つけるものと言うことができる。そしてそれは同時に、「夫に事ふるに貞節を専らとし」（注(19)に挙げた論説、一四九頁）といった常識から外れた自分自身の姿を、家族以外の人々の前に晒す行為でもある。

こうして世間体を顧みず、自らの意思や感情に任せて、世の中の常識を軽んじた態度を見せることに躊躇がない貴船夫人は、麻酔を強行しようとする周囲に対し、「何うしても肯きませんか。それぢや全快つても死でしまひます」（八頁）という、秘密を守れなければ死ぬしかないという脅迫とも言える言葉によって、遂に麻酔無しでの執刀という想像を絶する状況を導き出す。[23] 以上のように、貴船夫人の周囲の現実・社会からの逸脱は、〈死〉の以前から、実は相当に見て取りやすく描かれているのである。

③高峰と社会との関わり方

一方、高峰はどのように描かれているだろうか。周囲が恐慌を来す中、高峰は冷静に、貴船夫人の異常な要求を受け入れる。「さ、殺されても痛かあない。ちつとも動きやしないから、大丈夫だよ。切つても可。」と彼女が言い放った時、「辞色ともに動かすべから」ざる「威厳」は「あたりを払」い、外科室は「満堂斉しく声を呑み、」「寂然たりし」空間と化した。ヒロインが場を制圧したまさにこの瞬間、「軽く身を起して椅子を離れ」、麻酔無しの執刀に向かう高峰を、夫人の親族も臨検の医博士も「一同斉しく愕然として」、誰一人止めに入ることはできず、手術が決行された、という作品内の事実があることから、既にこの時点で、二人の間に他の人間が立ち入れないものが流れていることは確実である（以上八頁）。本作で設定されているのが高峰の親友である画師による一人称の語りである以上、主観的な色合いが濃くなりがちな性質を帯びているはずではあるが、〈主人公二人によって制圧される外科室〉という、麻酔無しの手術を誰も止めようがなかったというこの事実があるからこそ、それと相俟って、「夫人、責任を負つて手術します」という

言葉を高峰が発した時の「時に高峰の風采は一種神聖にして、犯すべからざる異様のものにてありしなり」（九頁）という語り手の言も、単に独りよがりの主観に止まらないものとして読むことが可能になるのである。

夫人の方から積極的に働きかけて対峙の場に高峰を導いたことに着目する見解は、早くに鈴木氏によって示されている。[24] 九年間秘めてきた思いを込めて高峰と一対一で対峙する機会を、しかも麻酔無しでの手術という究極に刺激のあるかたちで、貴船夫人は確かに自らの手で摑んだというふうに描かれている。そして夫人が高峰を引き出した対峙の場は、その医師としての規範から逸脱した行為によって（たとえ万が一麻酔無しの手術が成功したとしても）、高峰の帝国大学出の医学士、病院の「外科々長」という社会的地位を失墜させかねない、高峰にとって後戻りの道はない場でもあったはずである。高峰の言動が夫人に比して極めて冷静であるとしても、彼は自らの身に降り掛かるかもしれない現実的な制裁を意に介さず、貴船夫人の常識的にはあり得ない欲求を受け入れ、麻酔無しでの執刀を選択し、実際に手を下すことで彼女に応えている。それを考えると、高峰を「観念」的、「自己完結的」、「独善」的（鈴木氏、注(24)参照）と断じてしまうことは憚られる。[25] ヒロインほどの積極さは描かれないとは言え、高峰も動じることなく社会規範から逸脱し、しかもその行動は、有無を言わせず周囲の人々を制圧する強さあるものとして描き出されていたのである。

④社会を無化する主人公たち

貴船夫人と高峰が、社会に縛られ虐げられているとは到底言えない、むしろ社会の常識など歯牙にもかけないような言動が描かれていることを確認してきた。こうした社会規範を無視して煩悶もしない二人のありようは、「現世での敗北を必至とする」[26]といった言葉では表現できないように思われる。そして、彼らの言動は、当然、それを支えるお互いへの思いの強さ、〈至上の恋愛〉を、その背後に読むことを促してくるだろう。次章では、主にヒロインの死の場面を

考察しながら、本作に於ける恋愛の描き方と、その社会との対峙の仕方、論説「愛と婚姻」との差異について考える。

三　〈恋愛至上〉の描き方――「外科室」と「愛と婚姻」との差異――

①貴船夫人の自決の意味

前章③で見たように、外科室内には手術開始に当たって既に、主人公二人以外が立ち入ることのできない境地が生み出されていたと言えるが、手術が進むとともに物語も遂に夫人が胸に秘めてきた思いを放出させる佳境を迎える。高峰からの「痛みますか。」という問いに、「否、貴下だから、貴下だから。」と答えた夫人は、「凄冷極り無き最後の眼に」高峰を「じつと瞻り」、今生での最後の言葉を発する。その時彼女の口をついて出た言葉、それは、「でも、貴下は、貴下は、私を知りますまい！」というものであった。〈自分がこれほど思っているのに、あなたは私のことなど知りもしないのでしょう!?〉という、命を賭したこの恋が自分の片思いであるのかどうかを確かめようとするこの言葉こそが、夫人にとって口にした以上は生きてはいられない、命と引き換えにせねばならない重みを持つ言葉、裏を返せば命と引き換えにしてもどうしても言わずにはいられない言葉だった、ということになる。夫人は「謂ふ時晩く、高峰が手にせる刀に片手を添へて、乳の下深く掻切」ったとあり（以上、一〇頁）、この言を発するか発しないかのうちに自決に走っているところ（傍線部）から、上記のことが読み取れるように叙述されていると言える。「夫人の死の動機が読者に鮮明ではなく」（藤村猛氏、注(16)参照、六九頁）などというところは全くない。[27] この科白から、彼女の心にかかっていたのが、高峰への思いが自分の一方的なものでしかないのかという苦悩であったことが窺え、それを無意識裡に口走って雲散霧消させてしまうことを避けたいという自らの思いに対する意地が、彼女に麻酔拒否の強硬な態度をとらせていたと窺えるように描かれている。秘密を守りたいだけであれば病院を変える、或いは執刀医を変えることで高峰と距離を取り、

できる限り意識の外に追いやろうと努力してしかるべきであるが、「声は凜として」「刀を取る先生は、高峯様だらうね！」と念押ししている夫人の言辞からは、そうしたことを彼女が試みた形跡は窺えない。彼女の「秘密」とは、他ならぬ恋の相手高峰ただ一人に対して、守りたくもあり、同時に守りたくなかったものでもあったと言えよう。

本稿第一章③で引用した「魔睡奇談」では、麻酔による譫言で周囲に迷惑を及ぼしたり、自らに禍いが及んだりすることのないよう、平時の行いを慎むべし、との教訓が見られたが、「外科室」に於いては、夫以外の人を思うという、まさに世間的には慎むべきであるはずの事柄を、無意識裡にではなく、研ぎ澄まされた意識の下で公言するならばしようというヒロインの意思の表現の為に〈麻酔による譫言〉というモチーフが取り込まれ、麻酔を拒否するヒロインを通して、「魔睡奇談」末尾に見られたようなありふれた教訓を嗤うが如き相貌を、作品が獲得していると言える。

夫人の自死について、夫以外の人を思っていたことを吐露してしまったので生きていられなかったというような、規範に反した思いが明るみに出たことを気にかけての死、という読み方が授業ではとかく学生から提示されがちなのだが、[28] 作品に即して読めば、彼女が気にしていたのは世間体というようなことではあり得ないことがわかる。彼女の言葉に対し、高峰は一言、「忘れません。」（一〇頁、以下同）と返す。その時の夫人の様子は、「伯爵夫人は嬉しげに、いとあどけなき微笑を含みて」絶命する、というふうに語られており、世間の掟を意に介していたら、こうした反応にはならないはずだからである。こうした事態を引き起こしたからには家族を巻き込むことは避けられず、親族が見守る中での出来事である以上、彼女の死後、残される夫と娘が恐らくは大変な醜聞の中に置かれるであろうことは想像に難くない。しかし、彼らに対する気遣いなど、この時の夫人には微塵もないように見える。これによって作者の意図は明白であろう。彼女の死は現実からの逃避や自己処罰ではなく、自らの恋を有耶無耶の内に散らせたくないという意地と、相手の思いのほどをどうしても確認したいという欲求と、そうした内にある激情に逆らえずに身を任せた、命を賭した渾身の賭け

であるという読みを促すように描かれている。吉田昌志氏は「「聖化」された恋愛が現実の社会では実現されえず、現実を超えた世界（天上）での成就が望まれている」とする（注(26)参照、六二～六三頁）が、ヒロインの意識にあるのは自らの思いが片恋か否かということなのであって、命を賭けて高峰にそれを伝えた彼女の望みは、この瞬間目の前にいる高峰の、自分への恋情を確認するという意味での恋の成就だったのではないか。そして彼女の死に際の様子は、高峰から満足のゆく答えを引き出せたことを示している。[29] そういう二人を「天なく、地なく、社会なく」と語る語り手の評言は、（下）の末尾で二人が「天に行く」ことを願う語り手の言と明らかに矛盾している。それを考慮すれば、語り手自身の思いとは別に、（上）末尾の語り手の評言は、天上と地上いずれに於ける永続的な結びつきも眼中にない、そのヒロインの思いに反応した言葉であることが示されていると読めるのではないだろうか。

②高峰の自決の意味

前節で見たようなクライマックスは、高峰がヒロインの欲求を受け入れるというかたちで麻酔無しの手術を受けて立たなければ成立しなかったものであり、自らの社会的地位を犠牲にして顧みない高峰の言動と同日の自死の背後には、当然ながら、ヒロインへの恋情を想定しなければならない。[30] 高峰と兄弟以上の間柄であり、九年前の出逢いの場にも居合わせた、一人称の語り手によって語られる（上）が、本稿第一章④で見たように、高峰の恋情を端から想定し、その真情に着目することで、ある「偏向を帯び」ること（越野氏、注(14)参照）は確かにあり得るとしても、「「予」の語りによる仄めかし抜きに〈上〉と〈下〉の間に高峰と夫人の相思相愛の恋愛関係を読むことはできない」（岡本氏、注(13)参照、以下この段落内の引用、すべて三〇二頁）と言うのは極端に過ぎよう。前章からここまで見てきた、（上）で二人が取った行動と、直接話法で提示される科白を語り手の制御を受けていないものとして見るとき、やはりそこには九年前からの動

かしがたい恋情を読むしかないのではないか。岡本氏は、高峰の「忘れません」との返答から「夫人への恋心は読み取れない」、麻酔無しの手術を「求める患者のことなど忘れるはずがなく、恋愛感情による発言とは決め難い」などと言うが、第一章以降述べてきたように、そもそも夫人に対しての特別な感情抜きに、麻酔なしの手術というような異常な大事を受け入れるというのは説明がつかない。

岡本氏は、（下）の九年前の小石川植物園での出逢いの場面でも、高峰からヒロインに対しての恋愛感情は読みとれず、彼女に「より心を動かされているのは「予」である」との読みを示しており、その根拠として、「予は画師たるが故に動かされぬ」（一三頁）との語り手の発言から「高峰は画師ではないが故にさほど心を動かされなかった」という解釈を引き出している（以上三〇二～三〇三頁）が、これも成り立ち難い。その前に語り手と高峰が、「水際が立つ」佳人であるヒロインを含む三人の婦人たちとすれ違った時の「見たか。」「むゝ。」というやり取りによって、特に三人の内の誰と特定する必要もないほど二人が思いを共有している様が語られている（以上一一頁）のだから、それを前提としての発言としてみれば、語り手の先の発言は、「高峰はまた別の理由で心動かされたのだ」という意味として捉えるべきである。[31]高峰が（下）で語り手に対してただ頷くだけだったり、（上）で冷静であったりするのも、深く心を動かされたり、深い思いを湛えていたりするためであるとも読めるのであるから、これらから高峰の恋愛感情を否定し、高峰の死もそれによるものであることを否定するのは無理があると言える。

これまで見てきたように、高峰と貴船夫人、両者の思いが通じ合っていることを（上）の展開全体が証しているとも言え、婚姻という世俗的な形をとらない二人の恋の成就は、（上）全編を通じて描き出されていたと言えるだろう。

③「外科室」と「愛と婚姻」、その差異

岡本夢紬氏は、「家庭と高峰との間で煩悶し死んでいった貴船夫人に同情を寄せ、せめて自分の語る物語の中では自由な恋愛を成就させてやろうという「予」の姿勢」（前出、三〇九頁）を見ているが、本稿第二章②で見たように語り手が同情を寄せているのはむしろ夫たる伯爵の方であり、ヒロインに「煩悶」は見られなかった。村松定孝氏はかつて「鏡花の本作に示した愛の主張は（中略）「愛と婚姻」の主題に共通するものである」[32]と述べた。「夫への罪悪感、華族としての世間体、高峰の名声を傷付け地位を脅かす醜聞、そして、彼が自分を記憶していないことへの怖れ、死と引き替えにそれらを押して彼女は相手に思いを打ち明けた」（市川氏、一九頁）、ヒロインが「母として妻として、婚姻制度と高峰への恋との間で懊悩する物語」、「結婚制度に飲み込まれた一人の女性の恋」（岡本氏、三一〇頁）などというように本作を規定する見解は、社会の圧制の下で人間の自由な感情が制御されるとする「愛と婚姻」の主張を小説内に持ち込みすぎているところから生じていると考えられる。主人公たちの科白や周囲の人物たちの反応などを見ても、主人公たちは一向に社会を意に介していない様子が明らかであった。高峰への恋情のみでヒロインの心が占められているところがこの作の眼目であり、そういう意味で「外科室」は、「愛と婚姻」が描いている、現実に於ける社会と恋愛との関係をストレートに反映してはいないのである。しかし、それは両作品が無関係であることを当然ながら意味しない。

十川氏は、本作の「不自然な点は、二人の愛が実際には世の中の道徳はもちろん、当の相手とすらもほとんど関わらないところにある」として本作に「実社会を変革する契機」を認めていない（二六頁）が、注(15)の拙稿で見たように社会の強大さをいやが上にも意識していた鏡花としてみれば、如何ともし難い現実を小説の中で反復するのではなく、せめて虚構の作品の中では社会を無化するような人間の姿を描くことで、現実に於いてはうちひしがれるしかない鬱屈を解放し、社会に対して一矢報いようとしていたと言えるのではないか。本稿でも見たように、鏡花は完全に現実社会

から隔絶したものを描きたかったわけではない。材の採り方や舞台設定などに現実との接点を用意し、（上）での主人公たちの言動を衆人環視の中で展開させ、主人公二人にそれぞれ高い社会的地位を用意し、ヒロインに夫や娘の存在を設定したのも、現実社会の中に身を置く存在として彼らを描こうとした故であろう。そういう彼らに社会を無化させること、それは社会批判が切実であればこその（注(15)の拙稿参照）、現実には抗いようのない社会に屈しないための小説家としての方策であったのではなかったか。そうした社会に対する姿勢を潜ませた作品を世に放つことで、鏡花は彼なりに社会と切り結ぼうとしたのではないだろうか。それが、小説を反社会の牙城として社会の力に抗しようとするこの時の彼なりの方法であり、論説とは異なる、小説という媒体の虚構としての意義を問う試みでもあったのではなかろうか。

四　〈幻想〉が発動するとき　――結びにかえて――

本稿第一章では、ヒロインによる麻酔拒否と高峰による麻酔無しでの手術といったモチーフの検討から、読者の眼を主人公たちの心の内に向かわせてゆこうとする意図を窺い、第二章・第三章では、その力を意識するが故の作者なりの社会への対峙の仕方として、強大であるはずの社会を無化し、恋愛のみを重んじるような主人公たちの描出を見た。こうした主人公二人の〈恋愛至上〉の描き方（（上）で描かれる異常な事々）を支えるには、作品内にのみ通用する或る論理＝リアリティなるものが必要になるだろう。社会というものが本来無視できない強大なものであるからこそ、それを意に介さない強靱さを彼らに付与するに当たって、それを支え得るものが必要とされた。それが、〈一瞥の恋〉〈九年間にも亘る没交渉の状態での高峰・ヒロイン双方の恋の持続〉といった〈非現実的設定〉であったのではないか。至上の恋愛が強烈なものであればあるだけ、それを支えるものも現実に即したものでは事足りなくなるのは必然である。同時代以降、「現実感の薄い不思議な恋愛」（藤村氏、前出六九頁）などと評される本作だが、二人の恋愛の性格と不自然な

設定との関連性が十分考察されてきたとは言い難い。（上）に描かれる至上の恋愛の発端を、時系列を逆転させて（下）で描き出すとき、（上）の重みを支え得る力を持つものを供する必要があり、それには、現実・常識の範囲内のものでは不都合であったに違いない。そこで、主人公たちが一瞬で恋愛に向かう、不可思議な力に導かれるような魂の交感という要素を入れ込まざるを得なかったということであろう。

鏡花のこの目論見は、同時代評を見る限り、ある程度成功を収めたと言える。本稿第一章①で見た、「小説界に一生面を開きたる」「峭抜の想に富」んだ「深酷」なる恋愛との評価は、〈一瞥の恋〉〈没交渉の九年間の恋の持続〉というモチーフに着目したところからも導かれたものであった。八面楼（宮崎湖処子）は、「泉鏡花作『外科室』」（『国民之友』第二五七号〔明治二八・七・二三　民友社〕）に於いて、次のように論じている。

> 某伯爵の夫人、疾を得て某病院の外科室にあり、一医学士の手術を経、半途に手術者の手を拉して遽かに自刃し、手術者も亦同日に自刃す。渠等は曾て小石川植物園に於て、偶然相見て、双心相許したものと是れ「外科室」の素（すじ）なり。是の如き深刻なる恋愛は泰西的にして東洋的にあらず。恐らくは翻案乎　（二八頁。）[33]

西洋的であるとして「翻案」を疑われるほど、本作に描かれる恋愛が、従来の日本の小説には見られなかった「深刻なる恋愛」であると捉えられていることがわかるが、黒丸圏点が打たれている箇所より、湖処子が「曾て小石川植物園に於て、偶然相見て、双心相許した」というところに「深刻」さを見て取っていることが窺える。即ち、一瞥しただけで双方恋に落ち、その後九年間交渉がないままにその思いを保ち続けた、というところにこの評者が感銘を受けたということが示されていよう。そして波線部からは、主人公二人の「自刃」にも焦点を当てようとしていることが窺え、この評者の関心が命を賭しての恋愛というところに向いていることもまた確実である。『早稲田文学』第九十二号（明治二八・七・二五　早稲田文学社）誌上で島村抱月（筆名は「ほしつくよ」）も次のように評した（時文月旦「『文芸倶楽部』第六編」）。

医師高峰と貴船伯爵夫人とが、命を精神的純愛の前に捧げたる、其の純愛を影写法によりて描き出だせるものといふべし、而して等しく恋愛に筆を着けながらも、滔々たる世の凡庸小説と全く別なる方面に立ち、恋愛小説の動さもすれば陥らんとする実感主義の通弊を脱し得たる所、此の作の主たる特相ならんか、（一八〇～一八一頁）

二重傍線部より、「精神的純愛」とあるように九年もの間何の交渉も持たない恋愛であるということ、そうした恋愛に命を捧げるということ、に着目していることが窺える。「飜案にあらざるかを疑」われていること（一八〇頁）や、「影写」（透き写し）といった表現から考え合わせるに、精神によって結びつく恋愛を命よりも高位に位置づける本作が、常日頃見慣れているような、恋愛を描いて直接的な「実感」がある作品とは全く異なる趣を見せている、ということが主張されているものと見られる。このように、「外科室」は命を賭した〈恋愛至上〉を主題とした作品として早くから意識されたが、命をかけた恋そのものは文学の主題として特に珍しくもないことを考えれば、〈情を交わしあっている者同士の心中〉といったものとは異なって、一瞥の恋から没交渉の九年を経て、お互いの思いを死を以て表現する、という極端から極端に振り切れる構想に、当時の文壇人たちが「世の凡庸小説と全く別なる」「峭抜の想に富」んだ「深刻」さを看取したと見ることができよう。

「外科室」の恋愛の描かれ方は、このように斬新と評される衝撃力を持ったが、しかし一方で、「不自然」であるとの批判を招くことにもなった。「鏡花が小説の欠点は其結構の奇抜に過ぐると其人物の稍もすれば不自然ならむとするにあり」（前出「小説界の新傾向」『帝国文学』第八号「雑報」欄一〇五～一〇六頁、圏点原文のママ）、「高峯学士と貴船夫人は唯一回相見たるのみにて相思の情成熟し数年の後再び病室に相見えて毫も減ぜざる如き恰も露人の深酷に肖たりと。斯る不自然なる恋愛は露人とても決して有らざるべし」（魯庵生〔内田魯庵〕「小説界の新潮流（殊に泉鏡花子を評す）」『国民之友』第二六二号〔明治二八・九・一三〕三六頁、引用は注(33)に同じ）などというような非難を招いてでも、「奇抜」で「不自然」な構

想を求めたのは、主人公たちに社会を無化させる至上の恋愛を描き出すために、小説内に於いてそれを背後から支えるものが必要だったからである。社会の規範など眼中にない、そういう境地に彼らを至らせているのは恋愛の力であり、主人公二人をめぐる〈恋愛至上〉の描出を支えるものを模索したとき、鏡花は〈非現実〉＝〈幻想〉の領域に一歩踏み出すことになったと言える。十川信介氏による、本作の不自然さは「彼が自分の中にいだいている別世界の想念をまだ十分に形象化できず、流行の「社会に罪あり」というような風潮に安易にもたれかかったことにもとづく」との見解（前出論文、二八頁）に再考の余地があることを述べ、またかつて拙稿で「おばけずきのいはれ少々と処女作」（『新潮』第六巻五号〔明治四〇・五・二〇　新潮社〕）に見られる鏡花の「超自然力」への志向に言及して、常識的感覚からすれば不自然なことこそが描きたかったのであろうとした見解（注(7)五一九頁）について、単純に鏡花の中にある「超自然」・〈異界〉への志向に拠るというよりも、社会と対峙し、その圧力を乗り越える手段を模索する中で〈幻想〉が発動したのではないか、ということを指摘して、本稿の締め括りとする。

注

(1)『青年文』からの引用は、以下もすべて『復刻版　青年文』第一巻（二〇〇三・一二・一〇　不二出版）による。なお、本論文では、引用全般に当たって漢字の旧字体及び変体仮名は通行の字体に改め、ルビは適宜省略した。また、引用部の傍線・傍点等は特に断らない限りは論者による。

(2)『読売新聞』は「ヨミダス歴史館」、『朝日新聞』は「聞蔵Ⅱビジュアル」により、「外科室」発表の明治二十八年六月までに限定し、『読売新聞』を「魔酔」で検索すると〇件、「麻酔」で検索すると三十五件、『朝日新聞』を「魔酔」で検索すると二件、「麻酔」で検索すると十五件（「魔酔」で検索した二件の記事を含む）を見出すことができる（「外科室」で想定されている麻酔剤は後述するようにクロロホルムと見られるが、検索結果はアヘンやモルヒネ等の記事を含む）。

（3）本文で引用するもの以外は以下の二例。『朝日新聞』明治十六年十二月二日朝刊二面では、誤って短銃により負傷した函館県大書記官有竹裕に「外科に堪能なる深瀬鴻堂氏が麻酔剤をも用ひず難なく頭部の銃丸を抜き取られ」るという療治を施したことが報道されている。『読売新聞』明治二十八年三月三十日朝刊二面「馬関見聞録」の見出し記事では、負傷した李鴻章の施術について、「施術の際は別に魔酔剤を用ひざりしも甚しき疼痛の様子見えず」とある。

（4）貴船夫人に麻酔を施そうとする際、「看護婦」から促され、腰元が、「夫人、唯今、お薬を差上げます。何うぞ其を、お聞き遊ばして」と呼びかけており、吸引式のものとわかる（『文芸倶楽部』第六編、三頁。本稿に於ける「外科室」からの引用はすべて初出により、以下頁数のみ示す）。クロロホルムについては、『読売新聞』明治二十一年十月二十八日朝刊三面に「従来普く施用せらるゝコロオルホルムの全身麻酔薬」とあり（記事の見出しは「新局所麻酔薬コカインの効用」）、「外科室」に於ける麻酔剤が同じく吸引式のエーテルではなくクロロホルムと見られることについては、河内重雄氏が、明治二十七年発行の医学書の記述を根拠として指摘してもいる。「泉鏡花「外科室」の一面――医学小説としてのリアリティーについて――」『語文研究』第一〇八・一〇九号（二〇一〇・六・二　九州大学国語国文学会）一二六頁参照。

（5）貴船夫人も、「ちつとも動きやしないから、大丈夫だよ。切つても可」（八頁）との言葉通り、手術が「佳境に進」むまで、「自若として、足の指をも動かさゞりき」という状態であった（以上、九頁）。

（6）青木紗「泉鏡花『外科室』論―舞台としての「外科室」―」『昭和女子大学大学院　日本文学紀要』第三〇集（二〇一九・三・五　昭和女子大学）三七、四四頁。

（7）（下）の、主人公二人の出逢いの場面の舞台となる小石川植物園の描き方が当時の現実に即していることについても、かつて拙稿に於いて指摘した。「〈非現実〉への通路――泉鏡花「外科室」の舞台設定――」『国語国文』第八六巻六号（二〇一七・六・二五　京都大学文学部国語学国文学研究室）参照。

（8）『読売新聞』『朝日新聞』両紙で「外科室」発表時までの麻酔に関わる記事を見ていくと、その中で、譫言について言及している記事は、管見の限り『読売新聞』に二件見出せたのみであった。一件は、明治二十二年十月二十八日朝刊一面所載、「大隈伯の謹慎」の中で、「朝に夕に国事を思はぬ暇とてなく右足切断の為め魔酔薬を服せし時も其囈語には家事、

私事等は更に語らず維新以来経歴せし国事に関する事のみ話せし程なるも」とあるものであり、もう一件は、本文の方で引用する「魔睡奇談」である。

(9)　以下、引用の二重傍線部及び波線部は「外科室」に通ずる内容、破線部は「外科室」とは異なる内容が見られ、特に注目したい箇所である。「一たび患者に魔睡剤を施せば分秒にして患者は眠るが如く死したるが如く忽ち病苦を忘れて仙境魔界に遊びたる心地となり頓に又心識の知覚を失ッて今の我あるを知らず恍焉惚焉として種種なる囈語を吐く此の時患者には譏誉栄辱の念なく如何なる英雄も如何なる豪傑も如何なる愚者も如何なる奸物も只蠢爾たる一物と成り了し語る所働らく所已に人間以外の一怪物と為るなりされども常に脳裡にある所のものは依然として其痕形を残し此の恍惚の間に於て雑然尨然と浮び出で終に発して一場の囈語となる」とある。

(10)　「痔疾なる婦人に良人附き添うて治療」の際、医師が「魔睡剤を掛けたるに見る〳〵婦人は夢中に彷徨して頓に人事を弁ぜざるに至りしが忽ち種々なる囈語口を衝いて起り果は嬌語喃々として間夫と密会の事に移り我が良人を悪さまに罵りて」とある。

(11)　九年前の植物園に於いて、ヒロインの側は、高峰が帝国大学の学生であろうという程度のことは摑めたとしても、個人を特定することまでは難しく、それを考えると貴船夫人は、病院で再会したことで高峰が何者であるかをようやく知ることになったと想定できる。しかし一方、相手が華族階級の女性であることから、市川祥子氏が「夫人の素性は園外に停まった馬車の紋を見るだけでも知れたはず」(「高峰の恋、宗朝の恋――「外科室」と「高野聖」との書かれない時間をめぐって――」『群馬県立女子大学紀要　国文学国語学篇』第二二号〔二〇〇一・二　群馬県立女子大学〕一七頁)と言うように、ただすれ違っただけでも高峰と語り手の側はヒロインの素性を摑むことが可能だったと考えられる。ヒロイン一行は自家用の馬車で植物園に来ていたが、例えば当時、自家用の人力車に「背に家々の紋章をつく」ということが行なわれていたこと(平出鏗二郎『東京風俗志　中の巻』〔明治三四・八・一五　冨山房〕第六章三節九八頁)、『太陽』第一巻三号(明治二八・三・五　博文館)所載、漣山人「昭君怨」に、高雄での紅葉狩の途上で行き逢った「一群の男女」の「女三人」の中の「年若き嬢」に心惹かれた語り手が、「誰が目にも彼は華族なるべし」と見当をつけ、また、彼らのお抱えの「車夫」と「行き違ひざまに其背を見れば、平

仮名にぷとぞ縫ひける」といった情報などから、「今京にふの字のつく華族」を探索し、宿の内儀から「子爵藤代」家の姫君であることを知らされる（六八～七〇頁）といったことが描かれていること、同じく『太陽』の第一巻二号（明治二八・二・五）・同五号（同五・五）・同六号（同六・五）の巻頭口絵・口絵裏解説で、華族・皇族の女性たちの写真と共に、出自、生年月日、学歴、結婚の年月日等が紹介されていること、等々より、作者鏡花が、前述のようなことを想定して執筆している可能性は十分にある。なお、右で引いた「昭君怨」は、語り手が画工であること、華族令嬢の平民との結婚が描かれていることなど、「外科室」に影響を与えた可能性があることを指摘しておく。

(12) 中川智寛氏は、「真の美」（一三頁）の追究者としての語り手が、「伯爵夫人が九年前の美女と同一か、または同程度の器量だという事を事前に知っていたからこそ、半ば強引に（中略）見学を申し込んだ」（「泉鏡花「外科室」論」『あいち国文』第七号〔二〇一三・九・三〇　愛知県立大学日本文化学部国語国文学科内あいち国文の会〕七三頁）と言うが、女性の美しさへの興味というよりも、高峰が執刀する貴船伯爵夫人の手術だからこそ見学したいという関心が、使用される言葉によって強調されている。

(13) 野口哲也「「観念小説」の時代の泉鏡花――「外科室」の位相――」『文芸研究』第一五三集（二〇〇二・三・三一　東北大学文学部国文学研究室内日本文芸研究会）、岡本夢紬「泉鏡花「外科室」試論　観察、そして解釈―予が画師たる利器―」『文学研究論集』第五〇号（二〇一九・二・二八　明治大学大学院文学研究科）。野口氏は、「手術に臨む高峰の一貫した冷徹さが装われたものでないとするならば、その空白に夫人への秘められた思いを読みとることは、厳密には「予」の語りに導かれたロマンティックな解釈である」として、「高峰の自殺は、患者の命を救うという、感情とは別に存在する職分を果たせなかった外科医としての責任を取ったものだと見ることも十分に可能なのではないか」と言う（四三頁）。岡本氏も同様に、「二人の恋愛に不自然さを感じるのは、そもそも高峰が貴船夫人に対する恋愛感情など持っていなかったからであろう」と述べ、二人の恋愛の物語は、自らの解釈を付加して作品を創造するという「「画師」の〈職掌〉に留意すれば、語り手が「画師たる」がゆえの〈想像〉の産物にすぎない」とし（以上、三一〇頁）、高峰の自殺については、右の野口氏の見解に賛同している（三〇六頁）。

(14)　こうした説は、高峰の恋情の有無についての解釈は異なるものの、越野格氏の「〈予〉は冒頭から観察者の役割を負って登場したとはいえ、真の美によって動かすべき、動かされるべき画師なのであり、その観察眼が矯激な愛に曇り勝ちになるのも仕方がない」、画師である「〈予〉の視線が捉えたものが、一種の偏向を帯びていることは明らかだ」といった論の影響下にある。「〈視線〉の開示するもの(1)――泉鏡花私論――」『青磁』第二号（一九八六・二・一六　青磁社）三四、三五頁。語り手に焦点を当て、語り手対ヒロインの物語として本作を読もうとする岡本氏の前出論も同様。

(15)　峯村至津子「泉鏡花「愛と婚姻」の再検討」『女子大国文』第一六九号（二〇二一・九・三〇　京都女子大学国文学会）。

(16)　先行論文に見られる次に列記するような文言が、現世の圧迫・束縛から死を以て逃れる、という解釈に立っていることを示している。「外的な条件によってうちひしがれる、内面的な人間性、愛情の尊さ、美しさを正面きって主張した」作品で、主人公二人の九年前からお互いを思い合う「憧憬の美は、世の俗悪にまみれることなく、ひたむきな死を賭しての純愛に守られた」（興津要「「外科室」の一考察――江戸小市民鏡花論――」『日本文学教室』第九号〔一九五一・四・一　蒼明社〕三七・三九頁）、「現世的な障碍に妨げられて遂に相結ばれ得ぬ二人の男女」が「報われぬ純情の嘆きを殆んど情死的な死に流し去つた」（三好行雄「泉鏡花における〈虚構〉の意味」『国語と国文学』第二八巻三号〔一九五一・三・一　東京大学国語国文学会〕二六頁）、「純愛の行く手を阻む家族制度への挑戦、すなわち個我の解放の障害になる社会通念への戦いを描いたものだとの読み方が可能」だが、主人公たちが「情死する」「外科室」は結局「現実の壁の前に破れた敗北的な作品」で、「後ろ向きのロマンチスト鏡花の姿を鮮やかに浮き彫りにしている」と同時に、本作の「情死」は「「観念」の「現実」に対する」「勝利の象徴」である（塚越和夫「泉鏡花・その作品――外科室――」『国文学　解釈と鑑賞』第三八巻八号〔一九七三・六・一　至文堂〕一一五頁）、「外科室」を含む「義血侠血」から「化銀杏」に至る観念小説について「社会原理に対置されたときすでに情の敗滅は明らか」であり、「事実、これらの作品で恋愛の情は多く死の悲劇に終息している」、「情の至純を対置することで搏つべき社会原理が照らし出される」（松村友視「明治二十年代末の鏡花文学――作家主体確立をめぐる素描――」『国語と国文学』第六七巻一〇号〔一九九〇・一〇・一〕五八頁）、「夫人が求めていたものは、いわば現世で成就する恋というよりも、天上の恋」であり、「死によって、地上の恋愛（身分や道徳に縛られる恋愛）からの解脱願望をも含む」（藤村猛「相克す

る恋愛――泉鏡花「外科室」論――」（『国語国文論集』第二九号〔一九九九・一・八　安田女子大学日本文学会〕七二頁）、「この世で成就しえぬ恋を死によって実現しようとし、死にゆく両人によって愛が永遠化された。」（吉田昌志「解説」『新編泉鏡花集』第三巻〔二〇〇三・一二・五　岩波書店〕四八八頁）、主人公たちが「身分の制約でかなわぬ恋を死を以って解決した」、「社会通念への痛烈な反発」と「恋愛至上」の作者の観念とが見られる作品（小林弘子「泉鏡花「夜行巡査」「外科室」――奇抜な着想で文壇に新風――」『群系』第三八号〔二〇一七・五・三一　群系の会〕七八頁）、「今世で想いをかなえられない故に自害する前近代的な選択」、「彼らの精神的な恋愛が当時の封建的な恋愛制度への主張となっている」（青木紗、前出論文三九頁）など。こうした説の提示が二〇一九年発表の青木氏論文に至るまで続いていることになり、研究史に於いていかに根強いものであるかがわかる。

(17)　二点の内の前者のみを主張している、楠原智恵「泉鏡花「外科室」私論――視覚から触覚へ――」（『近畿大学日本語・日本文学』第九号〔二〇〇七・三・三一　近畿大学文芸学部〕）もある。楠原氏は、「外科室」（上）で「貴船伯爵夫人方の人物」が「まるで監視をするように二人を囲んでいる」とし、「愛と婚姻」が言うところの「社会の義務」に「最後まで」「束縛された」「二人は社会によって心中すらも許されずに死んでいった」（二一頁）、「貴船伯爵夫人が「自由の愛」を貫かなかったのは、「親に対する孝道、家に対する責任」を思ってのことであったと「愛と婚姻」から推測できる」などと述べている（二〇頁）。

(18)　十川信介「「不健全」な文学――明治二十八年前後――」（『文学』第五一巻二号〔一九八三・二・一〇　岩波書店〕）二六頁。これを踏まえ鈴木啓子氏も、「『外科室』のドラマは、恋愛の当事者たる男女二人の間にこそ成立し」「伯爵夫人が命をかけて対峙しようとしている相手は、彼女が恋焦がれる高峰その人なのであり」「第三者（夫や親族によって代表される社会）はまさに脇役にすぎない」と主張した（「溢れでる身体、そして言葉――泉鏡花『外科室』試論――」『日本近代文学』第五八集〔一九九八・五・一五　日本近代文学会〕二四頁）。また早く笠原伸夫氏は、本作は「家族制度や婚姻制度を批判することを主眼として書かれたものでな」く、「なまぐさい現世的葛藤を消去し、ただひたすらに根源的（ラディカル）な愛のかたちを照射するところに、この小説の真価がある」と主張していた（『泉鏡花 美とエロスの構造』〔一九七六・五・三〇　至文堂〕七〇・七一頁）。

(19)　「愛と婚姻」は、『文芸倶楽部』同様博文館発行の『太陽』第一巻五号「家庭」欄に掲載されているが、例えば同誌第

一号（明治二八・一・五）「家庭」欄所載、寒澤振作「婦人の令名」に、「淑女、良妻、賢母と称せらるゝ」ことができれば「婦人のつとむべき道は充分にて、人生の能事了れりと云ふべきなり」（一四九頁）とあるように、当時の社会が女性に期待していたのは良妻・賢母としての役割を果たすことであって、一女性としての意思を通すことではないことが明確に示されている。

(20) 胸中の秘密を「夫にも聞かすことができないと凜然として言い放つ夫人は、かならずしも夫の伯爵や世間態を怖れているわけではない」（十川氏、前出二六頁）、「夫人は夫や世間に対し命を賭けて高峰との恋の秘密を守ろうとしているのだ」というような説明は、この際まったく成立しない。なぜなら彼女は、詰まるところ、自ら高峰への思いを吐露してしまうのであり、もし彼女が死んでも秘密を守りたいのであれば、彼女はそもそも手術自体を拒否すべきなのである」（鈴木氏、前出二五～二六頁）などの指摘がある。鈴木氏が否定するのは、例えば、「秘密」は「「愛のためせずして社会のため」にした婚姻によって生じたものであり、夫に対する恭謙、貞淑、温柔が、妻としての道、支配的な社会道徳であったゆえに、それに殉じようとすれば、いっそう堅く秘めざるを得ない」といった見解（三田英彬氏、日本近代文学大系『泉鏡花集』〔一九七〇・一一・一〇　角川書店〕五二一頁、補注八五）である。

(21) 前出論文一八頁。鈴木氏の言う伯爵夫妻の身分差とは、貴船夫人を「公家もしくは旧大名の侯爵家から新興華族の貴船伯爵のもとに、多額の結納金と引き替えに降嫁した女性」と想定することによる（同一七頁）。鈴木氏の見解の細部について確実な根拠を挙げることはできないが、貴船夫人が、親密さが窺える侯爵の発言には表だって逆らってはいないこと（四頁）、侯爵が貴船伯爵に対し「貴船」と呼びかけ（六頁）、様々指示を与えていること（六～七頁）等から、親族内での侯爵の立場の強さが窺え、彼を貴船夫人の父親と想定するに足る材料は与えられていると言える。

(22) 「外科室」と同年に発表された樋口一葉「うつせみ」（『読売新聞』明治二八・八・二七～三一連載）第三章に、こうした行為が当時どのように受け取られたかを物語る表現がある。ヒロイン雪子の狂気の振舞いとして、見舞いに来た許婚の正雄に対して背を向けたままでいるという行為が描かれるが、それを語り手は「顔を横にして振向ふともせぬ無礼を、常ならば怒りもすべき事なれど」と語り、正雄は、狂気の言動ゆえ「ああ、捨てゝ置いて下さい、気に逆らつてもならぬから」

と促す（『樋口一葉全集』第一巻〔一九七四・三・二〇　筑摩書房〕五三六頁）。こうした行為が「無礼」なものであり、この作品のヒロインがそれをなすのは狂気ゆえ、という描き方がなされており、これに照らせば、衆目の中にあっての貴船夫人の自らの意思によるこの言動は、常識から甚だしく外れたものと言えるだろう。

(23) 手術開始に当たって、夫人が凛とした声で「刀を取る先生は、高峯様だらうね！」と呼びかけている（七頁）ところから、彼女と高峯は、当然ながら執刀医と患者として手術以前に顔を合わせていることがわかる。ヒロインがここまで強気の行動に出られるということ、そしてそれを高峯が受け入れていることから、百パーセントではないにしても、高峯が承引するかもしれないという期待やなにがしかの事前の感触があったればこそ、夫人はこうした賭けに出ることができたのではないか、ということも窺わせる展開であると言える。

(24) 鈴木氏は「外科室」（上）終局部での主人公二人について、自決直前の貴船夫人は、「貴下は、私を知りますまい！」（一〇頁）との「最期の言葉によってこそ、「久遠の女性」という偶像の座をかなぐり捨て、高峯の強固な観念性を打ち破る真の他者として高峯の前に立ち塞がる。相手が九年前の自分を覚えていないことを確信的に弾じるその言葉は、「忘れません」という返答によって成就をみる愛の告白の言葉であると同時に、相手に伝えることのない愛を、平然と保持し続ける高峯の自己完結的な愛の独善性を裁くものとなっている」と言う（前出、二六～二七頁）。

(25) 藤村猛氏は、「この恋愛は夫人主導のものではあるが、対する高峯の自律もある」として、「九年間もの行動を律する実効力―「品行一層謹厳」である力―を持ち得ていた」ことを挙げている（注(16)参照、七五・七六頁）。

(26) 吉田昌志「観念小説期の泉鏡花――兵役と戸主相続の問題を通して――」『国語と国文学』第七二巻八号（一九九五・八・一）六二頁。注(16)の諸論も参照。

(27) 岡本氏は、ヒロインが自決する際の科白を九年前からの思いを吐露したものとしてではなく、「病院で初めて高峯を意識し、そこではじめて何らかの感情を抱いたということも考えられなくはない」と言う（注(13)参照、三〇二頁）が、仮にヒロインの恋情が病院で近々に発生したものであるとしたら、その思いを伝えないうちは、執刀医である高峯が患者としてのみ彼女を見、特段の感情を抱かなかったとしても、それは当然ということになろうから、心にある秘密を守る

ための麻酔無しの手術の要求はともかくとしても、自決と同時に「あなたは私のことなど知らないのでしょう?」との言葉が発せられるとは考えにくい。

(28)　三好行雄氏は「「外科室」の伯爵夫人を死に追うものは、貴族社会の古めかしい階級倫理であ」ると述べている（注(16)参照、二七頁）。

(29)　市川祥子氏は、この場面に「恋愛の成就した圧倒的な絶頂感」を見ている（注(11)参照、一九頁）。

(30)　市川氏は、「貴下だから」の科白に接して初めて高峰はヒロインの思いを知ったとする（同前一九頁）が、それだと高峰が何故ヒロインの麻酔拒否を受け入れるのかが説明できない。手術に臨む前段階で、高峰はヒロインの思いに気づいていたことが仄めかされていると読めるのではないか。

(31)　そもそも岡本氏の主張は、語り手の語りを、高峰とヒロインの恋愛という方向に読者を誘導しようとするものとして捉えているのであるから、そうであれば当然この語り手の発言は〈高峰が心動かされた〉ことを読者に主張するものとして読まなければ論の辻褄が合わなくなるので、そういう意味でも矛盾が見られる。岡本氏の言うような語り手の誘導と、それに反する事実としての高峰の真情を明らかにしたいのであれば、後者の根拠は、語り手の発言以外の、語り手の制御を受けていないところに求めることが、語りの相対化のためには必要だが、「予」の語りの部分を根拠にしている点も疑問である。

(32)　村松定孝「作品解題」、『鏡花全集』別巻（一九七六・三・二六　岩波書店）八二五頁。

(33)　圏点原文のママ。引用は『国民之友 複製版』第一七巻（Ⅰ）（一九六七・四・一五　明治文献）による。

（本学教授）